

## 新センター長挨拶

筒井 泉雄 (大学教育研究開発センター長)



### Dの複合

就任して2か月あまり、静かなキャンパスと紅梅、白梅、ガマ合戦、桜の芽吹き、あたたかい一家団欒の入学式、桜吹雪と2、3、4月を過ごさせていただきました。ようやく桜葉が目立ちはじめ、キャンパスに学生たちがあふれかえる日常と、連続した業務の日々に慣れつつあります。新任の春が大学の成績改革の年であり、何もかも手探りで始めなくてはいいない状況に、同姓の故人のごとく、峠から大学の行く末を眺めつつ、遅ればせながら参戦とならなかったことが残念至極です。とはいえ、歯車は片時も休まず回転し続けており、こちらは時計片手の3月ウサギに追い立てられる日々を過ごすこととなっております。

本年度入学生からの本格的GPA導入ですが、すでにGPA自身が中央教育審議会のだした方向性の中に含意され、大学評価とも関連した、避けて通れない、いばらの道となっている以上、大学、ひいては共通教育がどのような方向に舵を取り運用していくかが、ここ数年問われることになると思われます。

過去のデータをそのまま鵜呑みにすることはできませんが、GPA導入に際し、一つ思考実験をしてみます。入学後4年経過し、昨年度に卒業年度をむ

かえることになった学生の成績データを基にすると、おおよそ120人が今回導入されるGPA不足(D、Fの取りすぎ)で卒業できないことになります。実際に卒業できなかった(しなかった)学生は240名あまりですから、約半数がGPA不足です。しかしながら、GPA不足120名の集団中、必要単位が50以下の学生(既得単位が94単位以上：あと1年で卒業できる可能性のある集団)は86%弱。かれらの平均GPAは～1.6、取得単位の平均は136。1.8(卒業要件)－1.6＝0.2(不足)∴かれらはあと1年で0.2×136(卒業単位)＝27、27GPAポイント、50単位中Aを13～4科目、ないしはBを27科目とって、やっと卒業要件GPAクリアとなります。これは結構至難でしょう。結果、卒業できなくて大学に残り続ける学生、少年老い易学成り難い学生が累積的に増えていき、それに付随したクラスの肥大化、教室不足、きめ細かい指導の不足等、悪夢の連鎖が引き起こされる可能性があります。

これは「すばらしい新世界」であり、「1984」であり、「タイムマシン」の未来でもあります。このような未来を向かえないために、あえて、ここで「海賊が来た！狼も来る！空も落ちる！」と声を上げる次第です。Fは履修撤回を駆使して大幅に減少すると予想されますから、教員はD判定をよほど気をつけて出すことが必要とされてくるでしょう。Dを復号(A～C)して、来るべき未来を！

## 目次

|                                      |                      |   |
|--------------------------------------|----------------------|---|
| 新センター長挨拶                             | 大学教育研究開発センター長 筒井 泉雄  | 1 |
| センター長を終えて                            | 前大学教育研究開発センター長 山崎 秀記 | 2 |
| I. 特集：レポート剽窃が問いかけるもの                 |                      |   |
| レポート剽窃問題対応で立ち遅れる一橋—いま、何をなすべきか？—      | 経済学研究科 水岡不二雄         | 3 |
| まず、善悪の彼岸から                           | 言語社会研究科 武村 知子        | 4 |
| 提出論文(レポート)による成績評価の現状                 | 大学教育研究開発センター報告       | 5 |
| II. センター活動報告                         |                      |   |
| 2009年度第2回全学FDシンポジウム実施報告              |                      | 6 |
| 現代GPシンポジウム開催報告                       |                      | 6 |
| 一橋・慶應義塾大学連携支援事業EU高等教育共同研究セミナー開催報告    |                      | 7 |
| 講義・演習連結型授業の創出、実践、普及—単位実質化の試み—事業報告    |                      | 7 |
| 英語教育プログラムCALL利用環境整備について              |                      | 7 |
| III. お知らせ                            |                      |   |
| コピペ判定支援ソフト「コピペルナー」運用開始のお知らせ 出版物の案内 他 |                      | 8 |

## センター長を終えて



大学教育研究開発センター長をお引き受けしたのが、2004年の夏でしたので、2010年1月末まで、5年半、センター長をお引き受けさせていただきました。この間、いろいろと問題はありましたが、曲りなりにも勤められた

のも、大学執行部を始めとして、教員の方々、センター・スタッフの皆様のおかげと、改めて感謝申し上げます。

この間、大学は教育・研究機関として改めて位置づけられ、研究と並んで、自らの教育に対するより実証的な説明を求められるようになりました。そして、これまでの単位の積み上げによる卒業認定から、GPAを加えた卒業認定へと移行するなど、本学も自らその教育・学習の質と成果を問う体制に移行しています。

しかし、教育と学習の質や成果を問い、教育の改善につなげる作業は、いかに簡単ではありません。何よりも専門家による実証的な評価・分析に基づいた冷静な議論と、大学全体として真摯に取り組む姿勢が肝要でしょう。その面でセンターが果たすべき役割は小さくありません。幸い、センターは優秀なスタッフに恵まれ、これまで一定の役割を果たしてきました。今後ともその重要性はますます大きくなり、大学教育研究開発センターという名の通り、高等教育とりわけ本学の教育を対象とした研究開発機関として、学内の信頼を得てゆくものと思います。

また、今年度から本格化したGPAの導入は同時に、学習のみならず学生生活への綿密な支援体制の整備が欠かせません。その意味で、センターの業務においても、これから学生支援センターや保健センターとの連携がより重要になってくるでしょう。

最初に「曲がりなりにも」と書きましたが、実際のところ、共通教育に関わる本学の教育改革については、多くの問題が解決を見ないまま残されており、私自身、ほとんどお役にたてなかったのではないかと、改めて反省しています。

設置基準の大綱化以降、全国の大学において、学科目教員のインテグレーションと全学出動態勢による教養(共通)教育の再構成が行われてきましたが、多くの大学では成功しているとは言いがたいものが

山崎 秀記 (前大学教育研究開発センター長)

あります。中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年3月)においても、設置基準の大綱化と教養部解体にともない基礎教育や共通教育を軽んじる傾向が否めないことから、早期から学生の学びの幅を狭めてしまうことに対する懸念が示されるとともに、基礎教育や共通教育の望ましい実施・責任体制の重要性が指摘されています。

知の相対化は、大学教育を考える際の最も重要な視点の一つであり、いわゆる専門教育と教養教育とは互いを相対化し補完しあうものとして良好な緊張関係にあることが、本学の教育にとっても重要であろうと思います。

かえりみると、非常勤講師予算の削減という厳しい状況の中にあっても、全学的な理解と支援を得て、共通教育は少しずつ改善されています。総合科目では、如水会の支援のもと、「社会実践論」、「キャリアゼミ」、「男女共同参画時代のキャリアデザイン」の寄付講義が開講されています。また、これを契機としていくつかの寄付講義が今年度から開講され、総合科目では、その多様性がまじってきています。

また、共通教育の各エリアにおいても、永続的な教育改革の努力がなされています。例えば、英語や数学では習熟度別クラスが導入されましたし、海外語学研修も英語に続いて、今年度はドイツ語でも始まります。さらに、長年の課題であったスペイン語と朝鮮語のクラスが今年度から新設されます。

これらの改革・改善に対して、ご尽力いただいた方々にあらためて感謝いたします。センター長が、とくに共通教育において、その職責を果たせるのも、担当教員の献身的努力と全学的な理解と支援があってこそといえます。

最後になりましたが、センター業務への変わらぬご理解、ご支援を改めてお願い申し上げますとともに、センターのますますの発展をお祈り申し上げます。

## I. 特集 レポート剽窃が問いかけるもの

### レポート剽窃問題対応で立ち遅れる一橋—いま、何をなすべきか？—

水岡 不二雄（経済学研究科）



一昨年度、私が担当する講義に、ある学生が、成績説明請求制度を利用し、「F」を合格点に訂正しろ、と要求してきた。その学生は、あるウェブサイトから明示なく剽窃（「コピペ」）してレポートを提出したので、「F」とされたのである。

参考文献をレポート末に列挙しながら、そのコピペ元だけ挙げないようにしたので、バレないと思ったのだろうか。

私のゼミではほぼ毎年、海外巡検を行い、その報告をウェブで公開している。ある年、学生に署名入りで書かせている巡検報告中に剽窃を発見した。その後、学生に厳しく注意するようにしたが、努力むなしく別の報告原稿に剽窃が発見された。いくら潰してもいなくなるというゴキブリを相手にするようで、げんなりである。

なぜ学生に、剽窃が悪で不正だという認識が乏しいのか。

まず疑わしいのは、「ゆとり教育」と手を携え中・高校に導入された「総合学習」である。ここでは、生徒が「主体的に」何かまとめて発表することが求められる。ところが、調査研究のスキルなど教わらない生徒たちだから、その辺のウェブサイトや書物をはぎ合わせ発表するしかない。原稿を数万円で代行作成する業者すらあるらしい。これが、「発表学習で自主性が発揮された」などと勘違いの先生に褒められる。こんな生徒が一橋大入試に合格すると、「新歓合宿」が待っている。最近は飲酒はないはずだが、「たいていの場合新入生は新歓合宿によってスポイルされるようだ。先輩からチョンボ授業がどれかということ教わり、チョンボ授業で単位埋めをすることを教わり…大学とはこういう物だ、と思わされてしまう」<sup>\*1</sup>と心ある学生が憂う状況が起こる。

一橋大学には「Asia Number One」という立派な目標がある。ではそのアジアで、大学は剽窃にどう対処しているか。

中国の香港大学は、剽窃は不正行為でしてならないと大学の公式ウェブサイトにも明示し、レポートの書き方の小冊子を作って学生に指導している。そのうえ、レポートは、紙媒体と添付ファイルの2通りで提出を義務付ける。紙は教員が読み、ファイルは剽窃発見ソフトに全通かける。剽窃が発覚すると、当然、厳しい処分だ。アジアで高い評価を受けるために必要な学生指導の厳しさを。大学はきちんと認

識しているのだ。

一橋ではどうか。まず、レポートの書き方について、大学は責任もって指導していない。柔軟で意欲に燃える新入生への指導はとりわけ大切なはずだが、レジャーランド時代をひきずって、学生の新入生歓迎委員会に丸投げされたままだ。

ひとたび学生が「スポイル」されれば、厳しいGPAを導入するほど、学生をかつての姉歯建築設計事務所のような偽装に追いやるだけとなる。バレなければ勝ち、正直者はバカ——モラルハザードが学内にはびこり、真摯な学問の場であるべき大学は荒廃していく。

このような大学がAsia Number Oneになれる見込みは、もちろんない。

では、一橋でいま何をなすべきか。3つの対策が緊急に求められている。

まず、大学が責任を持って、学習方法・レポートの書き方を新入生に指導する。ライティングセンターなどの設置、4月にフレッシュマンセミナーを開講し全新生に履修義務付けなどが有効だろう。問題の新歓合宿は、5月連休以降に移し、大学がそのスポンサーでないこと・全員参加義務でないことを大学側が明示して、合宿で頭が「スポイル」される前に、大学における勉強の倫理をしっかりたたき込む。

次に、「剽窃すると必ずバレる」公正な評価で正直な学生を保護して、モラルハザードの横行を阻止する。教員毎に剽窃の基準が異なれば不公平となる。これを改めるため、レポートをファイルで提出させ、その全てを剽窃発見ソフトにかける体制を全学的に導入する必要がある。

第三に、それでも剽窃した学生は、不正行為者として厳格に懲罰する。剽窃しても当該科目「F」のみでは、効果が薄い。現行の教場試験におけるカンニングと同じ、全科目「F」の厳しさと「剽窃は損」という抑止意識を学生のあいだに定着させねばならない。

このような、指導・判別・懲罰の3点セットで、剽窃は間違いなく大幅に減少する。立派な目標を格好よく掲げただけで、大学がアジアでの厳しい競争に勝ちぬくのは不可能であることを、われわれははっきり認識すべきである。

<sup>\*1</sup>「ロージナ茶会」<http://grigori.jp/log/2002-01/pre-log.html#0>（2010年3月18日閲覧）



とある高名な社会学者が書き下ろした新著の註釈部分が全てウィキペディアからのコピペでできていたことが印刷寸前にわかって、編集部が慌てふためいて取り繕いに奔走したという話が二年ほど前にあった。当の学者が自分でやったのか、あるいは助手のような、いわば書生にあたる人がやったことなのかかわからないし、その新著がその後どうなったのかも知らないが、その話をきいたときに私は、どうせなら「この本の註釈は全てウィキペディアからのコピーペーストで作成されています」とでも堂々と明記したらよからうにと思ったものである。今の今それはたいへん話題を呼んで、大きな問題提起ともなりえ、その学者自身にもいっそう箔が付きさえしなかったろうか——？

コピペ・レポートの増加には以前から気づいていたが、私自身は、コピペでは絶対に合格しない（少なくともまともな成績はとれない）類の問題しか出さないから支障はない。だがそういう小器用な手を使える分野は多くないだろう。盛副学長のお話にもあったように、分野によってはそれこそ独創性など頭から捨象して、既存の判例やら論理形やらをいかに正しく引用配列するかこそが問われる場合もある。そうすると、いわゆる「コピペ問題」とはいったい何の問題であるのか、ことの核心の輪郭は実は相当に不明瞭であることがわかってくる。そもそもコピペはなぜいけないのか、いったいそれは本当にいけないことなのか？ 「コピペはヒョウセツであり泥棒です」——ポオもトマス・グレイもモリエールも当時有名な自他共に許すパクリ屋だったし、それを言うなら「本歌取り」オンパレードの新古今集などは剽窃の集大成のようなものだ。著作権というもの確立してからまだ二百年も経っていない（それに「確立」と言えるほど疑問の余地のないものでも実はない）。一方、現在「ニコニコ動画」に上っている面白い動画作品の大半はおおむねコラージュでできている。コラージュとコピペはどう違う？ ネットで調べたことを並べて発表してみましようというに等しい教育が小学校で盛んに行われているからには、ネット全体が共有ライブラリに他ならぬと思って育ってもべつだん不思議はない。知的財産というもののそのもののありかた自体の揺らぎが目立つ

現在なのである。人の言語活動は本来的に全てが引用であるというポストモダンの認識さえ草の根にまで行き渡りつつあるとおぼしい今、ネットカルチャーにどっぷり浸って育った若い人たちに「コピペは犯罪です」などとただ力説したって誰も納得しやしないだろう。コピペの「泥棒」という側面は実のところ、変動期にあるメディア全体の様相と絡みつつ「なぜ人を殺してはいけないのですか」という（誰もろくに答えられなかった）アレと同じくらい根の深く広い問題を孕んでいる。

一朝一夕に考えるには余りあるそうした知財とメディアの大問題にさらされつつも、大学のスタッフが「教師」の立場においてまずもって専ら思考を傾注すべきポイントは、「大学という場所をベースに書かれるテキストはどのようなものであるべきか」という、その一点につきるだろう。「楽をして単位をとろうとするのは許せない」？ だが何も学生の労力の多寡を評価する目的でレポートを書かせるわけではあるまい。論文であれレポートであれ、そのつど書かれるべきテキストを自分がいったい何のために書くのか、どういうふうにそれが書かれれば、書く自分にとってそれを書く営為が徒勞でなく、単なる単位集めの手段でもなく、何らかの有為なものごとでありうるか、単に紙を無駄にするのではない何事かをなしていると思えればこそそれは充実した、楽しくさえある営みでありうるのだという、そのことをまず教えよ、自分が書くものについてそういう地平から考えつつ、みずから確信をもって発語する、そのためのスキルをこそまず教えよ——と、そういうことだと目下私は考えている。そうすればおのずから安易なコピペレポートは減る。泥棒やサギを指弾するのは必ずしも大学人の務めではないだろう。やるべきことは別にある。コピペの問題は、学術とは本来何かという、常に問われ続けるべき問題と緊密なセットになっている。

# 提出論文（レポート）による成績評価の現状

大学教育研究開発センター報告

2010年2月の全学FDは反響が大きく、参加者のアンケートでも低年次の学生に対する「レポートの書き方」指導の体制を作ることの是非など、様々な意見が寄せられた。

その一方、「そもそも提出論文による成績評価は、学生が履修した全授業科目の何割を占めるのか」、「学生は一年間に、平均して何本レポートを書くのか」、「成績評価方法によって成績分布は異なるか」という基本的な情報は、案外わかっていないのではないか。そこで本稿では学部生の履修・成績データと「学期末・学年末試験方法一覧」（いずれも教務課の提供による）を使用してこれらを推計し、議論の素材に供したい。

図1の一番上のグラフは、2008年度に本学学部生（科目等履修生等を含まない）が履修した授業科目（集中講義、他大学科目、卒論を含まない）75,317科目について、成績評価方法別構成比を示したものである。最多は教場試験の65.9%（実数では49,636）で、提出論文は18.7%（14,121）であった。学年別には1年生が10.7%、2年生以上は2割を超える。

次に学生を分析単位とし、2008年度の一人あたり履修科目数を集計したものが表1である。履修登

録した学部生（4,321人）は、平均して一人あたり年間17.4科目を履修した。提出論文は3.3科目であった。「教場試験」や「平常点」の授業でも中間レポートを課す場合があるから、学生の書くレポートの平均本数は、実際には3.3よりも多いと予想される。

図2は、再び授業科目ベースの集計で、AからFの5段階で評価する科目の（スポーツ方法を除く）、成績評価方法別の成績分布である。AやBの評価は教場試験より提出論文、さらには平常点で多いことがわかる（学年毎に集計しても同様の傾向）。

以上を要するに、提出論文で成績評価を行う科目は、学生の履修した全授業科目の中で大きなシェアを占めているわけではないが（図1）、教場試験より評点が良い傾向がある（図2）。他方、学生あたりの履修科目数では平均3.3科目と少ないが、ばらつき（標準偏差2.7科目）は比較的大きい（表1）。以上の結果が示唆することの一つは、学生に「レポートの書き方」の集合的指導を行うのもさることながら、ニーズの異なる学生に個別対応する新たな仕組みの検討が必要だということにあると思われる。

（報告：朴澤泰男）

図1 成績評価方法の分布（08年度）

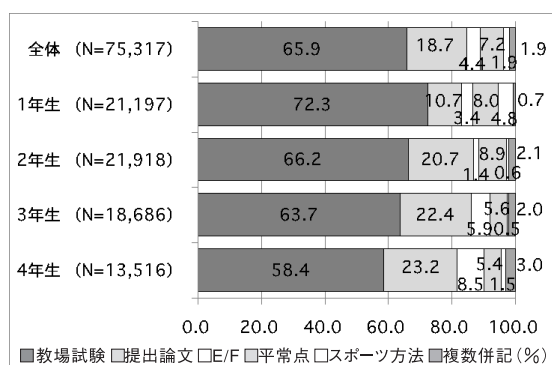


図2 成績評価方法別の成績分布（08年度）

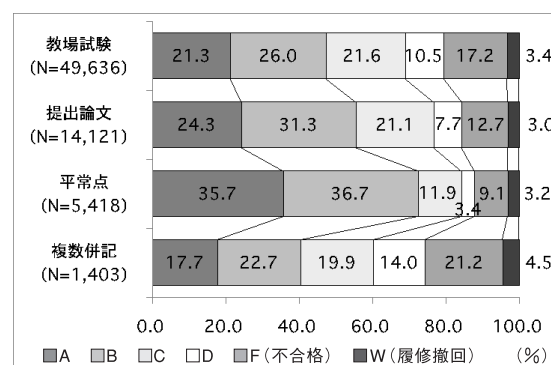


表1 学部生の履修科目数の平均値と標準偏差（08年度）

|        | 全体<br>(4,321人) |     | 1年生<br>(1,025人) |     | 2年生<br>(1,087人) |     | 3年生<br>(999人) |     | 4年生<br>(1,210人) |     |
|--------|----------------|-----|-----------------|-----|-----------------|-----|---------------|-----|-----------------|-----|
|        | 平均             | SD  | 平均              | SD  | 平均              | SD  | 平均            | SD  | 平均              | SD  |
| 教場試験   | 11.5           | 4.5 | 15.0            | 2.1 | 13.4            | 2.5 | 11.9          | 2.7 | 6.5             | 4.3 |
| 提出論文   | 3.3            | 2.7 | 2.2             | 1.7 | 4.2             | 3.0 | 4.2           | 2.9 | 2.6             | 2.4 |
| E/F評価  | 0.8            | 0.7 | 0.7             | 0.9 | 0.3             | 0.6 | 1.1           | 0.3 | 0.9             | 0.4 |
| 平常点    | 1.3            | 1.2 | 1.7             | 1.1 | 1.8             | 1.4 | 1.0           | 1.1 | 0.6             | 0.9 |
| スポーツ方法 | 0.3            | 0.6 | 1.0             | 0.1 | 0.1             | 0.4 | 0.1           | 0.6 | 0.2             | 0.5 |
| 複数併記   | 0.3            | 0.6 | 0.1             | 0.4 | 0.4             | 0.7 | 0.4           | 0.6 | 0.3             | 0.6 |
| 全体     | 17.4           | 5.6 | 20.7            | 1.2 | 20.2            | 3.1 | 18.7          | 3.1 | 11.2            | 6.3 |

## Ⅱ. センター活動報告

### 2009年度第2回全学FDシンポジウム開催報告

2010年2月2日(火)に、第2回全学FDシンポジウムを「レポート剽窃問題を考える」と題して行いました。筒井泉雄大学教育研究開発センター長の開会挨拶、盛誠吾副学長の挨拶に続いて、学外からお招きした3人の先生方の講演が行われました。

江口聡氏(京都女子大学)の第一講演「剽窃を未然に防ぐために」はご自身の教育経験から見た学生のレポートの変化や、レポートの書き方指導(出典の明記、パラフレイズの方法)に関する実践報告を主な内容とするものでした。また、非常勤の先生と一緒に議論を重ねることの重要性を強調されました。第二講演「いわゆるコピペ・レポート問題—コピペ検出ソフト『コピペルナー』開発の背景—」で、杉光一成氏(金沢工業大学)は「PCのCopy & Paste機能で他人の文章を丸写しして、自分の文章と詐称」する「コピペ」で作成したレポートの問題は、とにかく手の抜き方が著しいことだと指摘されました。

山本泰氏(東京大学)の第三講演「レポート剽窃問

題への組織的対応」では、『履修の手引き』(不正行為を定義)、授業(基礎演習、ALESS)、図書館ガイダンスなど、教養学部の重層的な取組みが紹介されました。また、大学固有の知の倫理として根拠を示す、オリジナリティといった思想の問題も含めて学生に指導することの必要性を訴えられました。

以上を受けて、水岡不二雄氏(経済学研究科)のコメントでは、ライティングセンターの設置などのレポートの書き方指導の体制、剽窃発見支援ソフトの導入、剽窃した学生への厳格な処分の三点が今後の本学の課題だと提言されました。

今回の参加者数は、大教センター関係者を除いて76人と、過去最多となりました。当日の様子は近刊予定の『全学FDシンポジウム報告書』第12号収録の講演記録をご参照ください。動画は大教センターで従来通り学内向けに貸出を行っているほか、今回はWebClass上でもご覧になれます。

### 現代GP総括シンポジウム開催報告

2009年11月12日、如水会館にて現代GP総括シンポジウム「フロンティアに挑戦する人材の育成—同窓会と連携する先駆的キャリア教育モデル」を開催しました。2007年度に採択された当該事業が最終年度を迎えるにあたって、これまでの取組みを学内外に公表するとともに、今後の活動につなげることを目指したものです。

杉山武彦学長の開会挨拶に始まって、文部科学省高等教育局専門教育課長澤川和宏氏より高等教育機関におけるキャリア教育の動向についてご講演を頂きました。次に、味の素株式会社特別常任顧問相原桂一郎氏より、学生の感想やキャリアゼミの担当講師を務めた先輩諸氏の感想をもとに、ご講演と今後についてのご提言を頂きました。同窓会連携のメリットを改めて確認致しました。

続いて、山崎秀記大学教育研究開発センター長からの事業報告の後、京都大学高等教育研究開発推進センター溝上慎一准教授より、学生の生活時間や将来設計に関する調査分析結果を交えながらキャリア

教育の成功指標に関するご講演を頂きました。今後の取組みについて一つの視点を得ることができました。

休憩をはさんで、後半のパネルディスカッションでは、講演者の溝上氏に加えて、関統造如水会事務局長(エネルギーゼミ幹事)、林大樹キャリア支援室長(社会学研究科教授)、加藤和宏キャリアデザイン委員会委員長(商学部3年生)の各氏を交えて、これまでのキャリア教育とキャリア支援活動の取組みについて、講演者の相原氏からのフィードバックやフロアからの質問も合わせて、活発な議論が展開されました。

当日は、学内外から約60名の参加を得て、今後のキャリア教育の方向性への重要な示唆を頂きました。ご来場いただいた皆様には重ねて御礼申し上げます。なお、シンポジウムにおける講演内容や質疑応答の詳細については、3月に刊行された本事業の報告書に収録されています。

## 一橋大学・慶應義塾大学連携支援事業 EU 高等教育共同研究セミナー 「欧州高等教育圏の構築—ポスト2010年の挑戦」開催報告

2009年12月25日(金)にブリストル大学から北川文美氏をお招きし、「欧州高等教育圏の構築—ポスト2010年の挑戦」をテーマにセミナーを開催しました。当セミナーは、一橋大学・慶應義塾大学連携支援事業におけるEU高等教育共同研究会の一環として開催されたものです。

北川氏の発表は、現在英国ブリストル大学で行っている欧州高等教育圏についての研究プロジェクトの経過報告と、氏が2009年にスウェーデンのルン



ド大学で行ったプロジェクト政策研究からの知見にもとづいて、現在の欧州における研究政策、高等教育政策の動向、展望について議論を深めることを目的としたものでした。

ボローニャ・プロセスが英国の高等教育に与えた影響はなにか、欧州高等教育圏(EHEA)と欧州研究圏(ERA)はどのような関係にあるのか、ヨーロッパの研究政策の動向と大学組織のあり方はどのように変わってきているのか、そして、知識経済における高等教育政策はいかにあるのかについて、多くの知見を得ることができました。

当日は年末の多忙を極める時節柄にも関わらず、学内外の多くの方々にお越しいただきました。また発表に続いて行われた質疑応答では、欧州の教育政策から留学戦略に至るまで、活発な議論が交わされました。大学連携支援事業の詳細につきましては次のサイト(<http://hk-univ-collabo.hit-u.ac.jp/>)をご参照ください。

## 講義・演習連結型授業の創出、実践、普及—「単位実質化」の試み—事業報告

平成21年度の大学戦略推進経費に採択された、単位実質化の試みである「講義—連結型授業の創出、実践、普及」では多くの成果を得ることができました。本事業は言語社会研究科、社会学研究科、大学教育研究開発センターの教員が中心となり、学生が主体的に学び、十分な学習時間を確保できる具体的な方策を考案・実施するものであり、教員とTAの連携を基盤としたきめの細かい指導を徹底することを課題としています。具体的には、各担当授業に資格審査を受けた上級TAを配し、チュートリアル方式での演習、少人数双方向型授業、グループ演習などを行い講義と連動させました。これにより、いずれの授業においても学生の学習時間、学習意欲、授業理解、コミュニケーション能力、共同能力に具体

的な成果を見ることができました。

同事業は19年度と20年度の教育プロジェクトに採択され萌芽的な試みを行ってきましたが、本年度は「講義—連結型授業」をさらに発展、拡充するのみならず、参加メンバーが定期的に会合を持ち、勉強会や報告会を行うとともに、TA集会を開催しTAによる発表や懇談会も行いました。また、ドイツと北米における訪問調査、さらに、海外留学生を対象にヒアリングを行い、学びの量と質を高める先進事例について広く情報を収集し参考としました。これらの活動と成果は全て、2010年3月に出版された報告書、『講義＝演習連結型授業の創出、実践、普及—単位実質化の試み—』にまとめられています。

## 英語教育プログラムCALL利用環境整備について

「グローバル・リーダー育成のための英語教育プログラム整備」の一環として、「ALCNetAcademy 2」「ATR CALL」「スーパー英語」の、3つのCALLプログラムを学内ネットワークにて提供しております。また、これらを用いる講義のため、受講者全員

の同時アクセスが可能な無線LAN環境を、4教室に整備しました。

詳細はweb ページ (<http://www.rdche.hit-u.ac.jp/~ll/>) をご参照ください。

## コピペ判定支援ソフト「コピペルナー」運用開始のお知らせ

2010年5月1日から、東教員控室のPCで「コピペルナー」を利用できるようになります。学生が提出したレポートについて、インターネット上のテキストや他のレポートからコピー・アンド・ペースト（複写、貼り付け）が行われていないかどうかを解析することができます。利用の際は、レポートの電子ファイルをUSBメモリ等でご持参ください。

## 出版物のご案内（2009年8月～2010年3月）

- 2009年10月30日 留学生教育を支える基盤—特殊要因経費（政策課題経費）研究報告—
- 2009年11月30日 全学FD報告書・第11号
- 2010年3月1日 人文・自然研究4
- 2010年3月1日 教員用授業ハンドブック2010年度版
- 2010年3月31日 平成21年度一橋大学大学戦略推進経費プロジェクト「講義＝演習連結型授業の創出、実践、普及—単位実質化の試み—」報告書
- 2010年3月31日 大学教育研究開発センター2009年度年報
- 2010年3月31日 平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「同窓会と連携する先駆的キャリア教育モデル」報告書

## 大学教育研究開発センター日誌（2009年8月～2010年3月）

### 1. 学内会議、研修

#### ■教育力開発プロジェクト

10月5日、11月9日、1月18日

### 2. 学外視察・調査、発表、会議などへの参加

#### 視察・調査

11月

- 教養教育に関するカナダでの現地調査とヒアリング（大学戦略推進経費プロジェクト）

3月

- 大学連携に伴うフランスとポルトガルでの視察と会議（戦略的大学連携支援事業）

#### 発表・講演

9月

- 日本教育社会学会（早稲田大学）
- 青山学院大学主催 エラスムス・ムンドゥス講演会

11月

- Association for the Study of Higher Education : 34th Annual Conference (Vancouver)

1月

- 平成21年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスターセッション（東京ビッグサイト）

#### 会議などへの参加

8月

- 全国大学教育研究センター等協議会（広島大学）

12月

- オープンシンポジウム：エラスムス・ムンドゥスの魅力と課題（駐日欧州委員会代表部・明治大学）

2月

- 第7回大学教育セミナー「アクティブラーニングが創る大学教育の未来」（金沢大学）
- 公開シンポジウム「教育の質保証—4つの大学の取組から」（お茶の水女子大学）

3月

- Trio-Conference among Hitotsubashi University, Oxford University and Australian National University

## ■Agora

■発行 一橋大学大学教育研究開発センター

■〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL 042-580-8000（一橋大学） TEL 042-580-8996 FAX 042-580-8997（担当：及川）

E-mail: [agora@rdche.hit-u.ac.jp](mailto:agora@rdche.hit-u.ac.jp) URL: <http://www.rdche.hit-u.ac.jp>

■第19号 2010年4月30日発行

■編集 センターニュース「Agora」編集委員会